

三猿

福島伸悦

今年は申年ですが、日光東照宮にある三匹の猿の彫刻は有名です。「見ざる言わざる聞かざるよりも思わざるこそまさるさるなり」という歌（出典はよくわからないのですが天台宗中興の祖・良源、あるいは鎌倉時代の仏教説話集である雑談集）があります。猿知恵と言ったらあまりいい意味で使われませんが、この歌には納得させられます。見て見ないふりをする、言いたくても我慢して言わないようにする、聞いても聞かないふりをするというのは、これらは人間関係をうまくするための先人の知恵であり、人生の処世術です。

しかし、いじめられている人を見て、見て見ぬふりをするのはいけないことです。我関せずで、肝心な時に口を閉ざしたりしてしまうのではいけません。本来の意味を理解し、相手の人を傷つけないように言うべき時は言わなければなりません。

私たちは自分のことはさておき、人の欠点や過ちは目につくものです。日常生活の中で人の悪口や行いや態度など気になることがたくさんありますが、自分のことは気にならないものです。そして、ついつい口出しして人間関係を気まぐずくしてしまいがちです。

人間には諸悪の根源ともいうべき煩惱があります。怒り、恨み、罪を覆い隠す、腹を立てる、嫉妬する、物惜しみする、相手をたぶらかせる、心にもなくへつらう、人の悲しみがわからない、おごり高ぶるなど自分の心の中にはどうしようもない煩惱を備えているということに気づかなければなりません。思わざるということは無関心になるということではなく、すべてを知った上で放っておくということです。私たちはどうしてもとらわれたり、こだわってしまい、放っておくということがいかに難しいかということです。煩惱から離れることによって「魔去る」ということになり、本来の自己（仏心）に帰ることができるのです。